

J. M. Synge と Gaelic League

池 田 俊 也

I

シング (John Millington Synge, 1871—1909) がアイルランド劇壇に登場した時期、ゲール語復活をアイルランド独立運動の推進力にしようとする団体、Gaelic League (ゲール語協会) の活動が最盛期を迎えていた。この Gaelic League の急進的な指導者達が *The Riders to the Sea* (1902) を除くシングの作品をことごとく反アイルランド的であると糾弾し、あらゆる手段を講じて上演の組織的妨害を行ったことは有名な事実である。シングの描く登場人物が、当時のイギリス本国でアイルランドの典型的国民性として伝えられていた、不潔、怠惰、虚言、強欲、飲酒癖、喧嘩好き、といった道徳的に劣悪な面を露骨に引き摺り歩いていたからである。League はこのようなアイルランドの古い概念を覆すのに躍起となっており、シングの性格創造は運動に水を差すものであった。又、シングが使用した台詞が Anglo-Irish 語 (アイルランド方言による英語) で書かれていたことも見逃せない事実である。League はゲール語で書かれた文学だけを国民文学として限定的に認め、英語による文学を排除しようとしていた。それまでの英語文学の中で、Anglo-Irish 語がアイルランド人を戯画化する為に用いられていたことが排除の主たる理由であった。従って、Anglo-Irish 語を使用するシングも同様にアイルランド人を揶揄しようとしていると Leaguer は考えたのである。Gaelic League の会員で、後に Sinn Fein 党のリーダーとなった Arthur Griffith がシング批判の中で、‘The author of the play presents it as true to Irish life . . . , and if the author can sustain it, we shall regret that so vile a race should be permitted to exist.’⁽¹⁾ と皮肉混りに述べているように、シングの作品の内容が実際のアイルランドの特殊性を描いてはいない、というのが League の考えであった。

さらに、シング自身がアイルランドの農民社会に寄生した地主階級、いわゆる Anglo-Irish Ascendancy の出身であったことも攻撃を受けた理由の一つであったと考えられる。実兄の Edward が土地戦争 (農地の囲い込みを巡る地主、小作間の争い) の最中、多くの小作農民を地所から追放したとあれば、⁽²⁾ シングがイギリス側について、アイルランド人を諷刺していると考えられても無理からぬことではあった。つまり、支配者階級に属する者がアイルランドの実際を描けるはずがないという見方が League の中にあったのである。しかし、この問題については他でも述べたことなので、⁽³⁾ ここでは触れないが、何れにせよ League によるシング批判の根底には、アイルランド国内に存在した二つの文化的潮流の

確執があったことは否定できない。シングに対する批判はそのまま、イエイツ、グレゴリー夫人などの英語を使用する文学者達に向けられた批判でもあったのだ。従って、シングと Gaelic League の関係を語ることは、19世紀から20世紀に到る激動期におけるゲール語文学と Anglo-Irish 文学との関係を知るうえで欠かせないだろう。

シングと Gaelic League の関係については、これまでに批評家も度々言及してきているが、その解釈はそれぞれ微妙に異っている。大別すれば、Nicholas Grene や G. J. Watson のようにシングと League を敵対関係として捉える考え方と Declan Kiberd のようにシングと League を同じ枠内で捉えて、両者間の論争が路線上の違いから生じたとする考え方がある。勿論、前者の考え方が主流であって、後者のような考え方は今のところほとんどないといってよい。Grene や Watson の考えの底にあるのはシングとアイルランド、特に農民との間に微妙な精神的乖離があったということである。Grene は “He [Synge] looked at Ireland always, in his own phrase, ‘with an eye that is aware of the arts also’, that is, always with the detachment of an external vantage-point.”⁽⁴⁾ と述べている。同様に、Watson は “Their [Yeats and Synge’s] idealisation [of peasant’s life] is itself a measure of their ‘outsider’ status.”⁽⁵⁾ と言っている。両者が指摘しているこのような農民との精神的乖離の考えは、そのまま Gaelic League に対するシングの姿勢についての解釈となって現われてくる。Grene は League に対するシングの敵意があったことを指摘して次のように言う。

He disliked the Gaelic League partly because he saw it as one of the standardising urbanising influences in districts where there was a tradition of native Irish speaking.⁽⁶⁾

Watson も又、League に対するシングの見方が推移したと考え、次のように論じている。

Sometimes he gives himself away almost unaware, as in an article ...where he is discussing the role of the Gaelic League, here seen as offering fairly harmless fodder to darkened minds while the Anglo-Irish writers create the way of true light...Later his view of the Gaelic League... was expressed more virulently.⁽⁷⁾

つまり、シングは自分に害の及ばない限り、League をほとんど無害だと見なしていたが、攻撃が激しくなるにつれて、態度を硬化させていったという解釈である。このような、二人の批評家の解釈はシングと League との間に明確な線を引くものであり、相互の異質性を際立たせるものとなっている。

その一方で、Kiberd は違った見解を取っている。それは、シングの League 批判が全

く異った立場からなされたものではなく、両者の間に線を引くことはできないという見解である。つまり、シングと League は本質的に集合する部分を持っており、相互で交わされた論争は路線の違いから生じた内部批判の性格を帯びているというのである。Kiberd はシングが League に同調する面を持っていたことを指摘して、こう述べている。

Synge often agreed with the League on matters of practical national policy...In his practical patriotism, his commitment to economic self-reliance, and his crusade for the Gaeltacht areas, he was in total agreement with major policies of the League. The one great difference lay in his opposition to the restoration of Irish throughout the country, for, in so demurring, he set his face against the primary aim of that organisation.⁽⁸⁾

確かに、Watson 達が指摘するように、シングは League に向って辛辣な言葉を投げかけている。例えば1907年、当時公にされなかったノートの中で彼は ‘The Gaelic League is founded on a doctrine that is made up of ignorance, fraud and hypocrisy.’ (CW,II.399)⁽⁹⁾ と激しい語句を使って批判している。遡って、1902年にも ‘Its [League’s] more definite hope seems quite certain to end in disappointment.’ (CW, II.385) と League の姿勢に疑問を表明している。ところがその一方で、1905年、イギリスの新聞、*Manchester Guardian* 紙に連載された紀行文、*In Connemara* (pub.1910) の中で、

For the present the Gaelic League is probably doing more than any other movement to check this terrible evil, and yet one fears that when the people realise in five, or perhaps in ten, years that this hope of restoring a lost language is a vain one the last result will be a new kind of hopelessness. (CW,II.341)

と、Gaelic League の限界を予見しながらも、その活動を半ば肯定するようなことを書いている。このような一見矛盾した記述は、しかし、そのままシング自身の自己矛盾を露呈するのではなく、むしろ Kiberd が指摘したように、シングは League に対して賛否相半ばする意見を持っていたと考えるべきではないか。移民を阻止する上で League が果した功績は大きかったし、ナショナリズムを民衆に浸透させたことを否定する者は誰もいない。シング自身それは認めている。しかし、League が農民に抱かせた希望が実現不可能なことをシングは良く知っていた。ゲール語の国語化など成就できぬことが、農民の現状を熟知したシングには解っていた。だが、紀行文が掲載されたのがイギリスの新聞であれば League の欠陥を述べる必要性はなかっただろう。League 批判はアイルランド国民、とりわけ Leaguer 達の目に直接触れる手段を使って行えば足りることだったからだ。シン

グは、だから League とは対極の立場に立っていたとは言い難いのである。以下、本稿ではシングとゲール語との関わりを述べたうえで、全集（Oxford版、1966）に収録された論説の中から Gaelic League に関する記述を考察し、シングが求めた言語のありようを論じることにする。

II

Gaelic League が国語化を推し進めたゲール語とシングとの関わりはシングのアイルランド観の形成及び、彼が文学語として採用した Anglo-Irish 語を語るうえで欠くことのできないものである。ゲール語の学習を通してシングはアイルランドの文化、伝統に目覚め、ゲール語の知識によって Anglo-Irish 語の可能性に気づいたからである。

シングとゲール語との関わりは次の二期、即ち Trinity College 入学から大陸へ渡る1888年から1893年までの五年間と大陸に渡り最終的にアイルランドに定住する1893年から1902年（1903年夏にパリへ渡っているが、これはアパートを引き払う為のもので短期の滞在であった。）までの十年間である。勿論、大陸遊学時代も夏の間はアイルランドに滞在し、アラン島旅行なども経験しているわけで十年間完全にアイルランドを留守にしていたわけではないが、ここではゲール語の体系的学習がパリ大学でなされたことを考えて大陸時代とする。

1893年、Gaelic League が発足した時、シングは『自伝』の中で ‘a real interest in the kingdom of Ireland’ (CW, II. 13) を抱くようになったと記している。しかし、それは League の運動に呼応した感情であるというより、それより五年前の Trinity College 入学以来培われてきた結果の感情であったといえる。Trinity College はプロテスタント系の大学で、本来アイルランド国教会（Church of Ireland）の聖職者養成機関であった。そこでは、ラテン語、ギリシア語、ヘブル語に加えて、当時アイルランドで最も歴史のあるゲール語講座が選択必須科目として開講されていた。⁽¹⁰⁾ゲール語が地方教区における宗教活動に欠かすことのできないコミュニケーションの手段であったことを考えるとプロテスタントとゲール語の繋がりとはそれほど奇妙なものではなかった。シングはゲール語とヘブル語の二科目を選択するが、その動機が宗教的なものに根差していなかったことだけは確かである。この頃すでに宗教には懐疑的になっており、(CW, II. 10—11) 聖職者になる積りは全くなかった。シングの甥、Stephens の『伝記』では、入学後かなりの間シングは講義には出席せず、部屋に籠って始終バイオリンを弾いていたということになっている。⁽¹¹⁾又、シング自身ピューリタンの信仰からアイルランドに宗旨を変えたことは言っているが、それとゲール語学習とを結びつけるような積極的な発言はしていない。従って、シングのゲール語の選択はピューリタニズムへの反抗からなされたと言っても差し支えないようだ。大学でのこのゲール語学習を回想して、後に彼は次のように書いている。

If we wished to learn a little of Irish language and went to the professor appointed to teach it in Trinity college, he found an amiable old clergyman who made him read a crabbed version of the New Testament, and seemed to know nothing, or at least to care nothing, about the old literature of Ireland, or the fine folk-tales and folk-poetry of Munster and Connaught. (CW,II.384)

Kiberd はこの記述を捉えて、大学のゲール語主任教授 Goodman の学際に触れ、シングが実際に教授と交流することがなかった為に誤解して書いたのだらうと指摘している。⁽¹²⁾確かにそういった面がなかったとは言い難いが、宗教に背を向けたシングにとって、宗教活動と直結した大学での学習は真の関心事から離れた所にあったのである。

大学での学習について、Trinity College Library に現存するシングのゲール語ノートの詳細に調査した Kiberd は、シングが窮めて丹念に文法の各項目を調べ上げ、基本的な作文練習もしているし、学習が進むに従いアイルランドの古代神話に登場人物を後の作品を髣髴とさせるような文体で描写していることを明らかにしている。⁽¹³⁾さらに、ゲール語試験で成績優秀者に与えられる奨学金を貰っていることや、アイルランド古代史に魅かれ、ダブリン周辺の遺跡を回り、ゲール語の文献を読み漁ったことなどを考え合わせると、ゲール語の学習は初歩の段階では漠然とした動機しかなかったものの、次第にシングの目をアイルランドに向けさせることになったことが解る。尤も、アイルランドに対する思いは自ら ‘temperate Nationalism’ (CW, II. 13) と語るように、Anglo-Irish Ascendancy という有産階級の道楽的な意味しかもたなかったといえる。このようなアイルランド讃美の傾向は Anglo-Irish Ascendancy の若いインテリ達に共通したアイデンティティ探求の現われであり、⁽¹⁴⁾シングもその例外ではなかった。つまり、Leaguer 達のような、政治的にも思想的にもはっきりとした背景はなく、むしろ憧憬に近い心理が裏に働いていたということである。

Trinity College でのゲール語学習がゲール語の骨格を形成するのに役立ち、シングをアイルランドへ精神的に結びつけることになったとするなら、パリ大学ソルボンヌ校で学んだ年月はシングをアイルランド文化、ナショナリズムの問題に向う姿勢を養うのに大きな影響があったと言える。シングはパリ大学で文学、言語学などの講義に出席するが、中でも特に強い関心をもって聴いたのは Braz 教授のブルターニュ文化論、Jubainville教授の比較言語論の二つの講義であった。Braz 教授はアイルランドと同じケルト文化圏に属するブルターニュの文化保存を説く学者で、時代と共に廃れていくブレトン語の復興に生涯を献げた人物であった。一方、Jubainville 教授は古代、中世ゲール語を他のケルト語圏の言語と比較し、その手段として神話、民間説話を積極的に取り入れる学者であった。⁽¹⁵⁾シングはこの二人からアイルランドの文化、言語に対する基本的な姿勢を学び取ったのである。その基本的な姿勢とは何か。1899年、彼は ‘Anatole le Braz’ と題する短文でこう

書いている。

He passed his childhood in close contact with the Breton peasantry, speaking chiefly in their language, sharing their simple Christianity; and now, *undisturbed by any political or social creed, he sees with a vague and unpractical disquiet the waning of much that he intimately loves.* (CW,II,394) (イタリック体は筆者)

シングが Braz 教授に共鳴したのは政治的、社会的な思想、信条に左右されることなく、古い伝統が衰微していく現実を哀しみと不安をもって眺める視点であった。この視点は後に *The Aran Islands* (1907) を初めとする紀行文の根底に流れる情調として反映されることになるが、重要なのはシングが農民との交流によって農村の実態に触れたうえで物事を考えることを教授に学んだ点にある。明確な思想、信条は時として見る者の目を曇らせる危険性を持っている。アイルランド農民を考える時、ナショナリストがともすれば現状を離れた思い込みで判断するのも、彼らが政治的な視野で農民を捉えている証拠である。シングが政治的になるのを嫌った理由がここにあった。シングは言葉を続けて言う。

In Ireland it is different. The same survivals of the old have not for us the charms of lingering regret, but rather the incitement of a thing that is rare and beautiful, and still apart from our habitual domain. If an Irishman of modern culture dwells for a while in Inishmaan, or Inisheer, or, perhaps, anywhere among the mountains of Connought, he will not find there any trace of an external at-homeness of the old.
(CW,II,394)

ここで彼はアイルランド的なものをことごとく神聖化して、アイルランドの「現実」の何たるかを知らない一部急進的なナショナリストに対して警告している。外面的な美しさだけを取り上げ、古いものがもつ真の魅力と意味に気づかないというこの指摘は League 批判に繋がることになる。

一方、Jubainville からシングはアイルランド古代の文化、言語をヨーロッパ的視野で捉えることを学んだ。彼は1904年、教授の著書、*The Irish Mythological Cycle and Celtic Mythology* の書評で、教授がアイルランド神話の起源を聖書の引用と合わせて論じている点を批判しながらも、古代アイルランドの宗教ドルーイド教の性格をヨーロッパの他の宗教と同じレベルで捉えていること、アイルランド神話とギリシア神話を比較しながらその関係を論じている点などを高く評価している。

M.D'Arbois [de Jubainville] has dealt, for the most part, with anterior Greek or Indi-

an relationships, but in his works we can get better, perhaps, than elsewhere a consecutive view of Irish mythology itself, with which one must grow familiar before it is possible to estimate its place in European archaeology.(CW,II.366)

アイルランド文化をヨーロッパという大きな枠の中で見ようとする Jubainville 教授の方法論は *The Aran Islands* 中の民話蒐集の際の基本姿勢として生かされている。例えば、「貞淑な妻の話」が語り継がれているのを知って、‘It gave me a strange feeling of wonder to hear this illiterate native of a wet rock in the Atlantic telling a story that is so full of European associations. (CW. II. 65) と語るように、シングはアイルランド固有の文化と大陸文化とを柔軟に比較しようとする。こうした柔軟性は劇の題材の点でも言える。*The Well of the Saints* (1905) の素材は明らかに大陸のものであった。⁽¹⁶⁾ これはシングがアイルランドの風土を描きながらも、人間存在の根幹に関わる普遍的な生そのものを指向していたことを意味する。が、このことについては後で述べることにする。

シング自身、Braz, Jubainville 両教授の影響の大きさを認めており、彼らから学び取った姿勢がアイルランドを客観的に眺めるのに最も相応しい方法であることを認識していた。1902年、シングは17世紀の文人 Geoffrey Keating に言寄せて自らの立場の正当性を主張している。

He [Keating] owes a good deal to his foreign studies — he passed through a college at Bordeaux after taking Orders in his own country — which gave him a knowledge of the outside prosperity of the world with which to compare the things he saw in Ireland, while in a purely intellectual sense the intercourse *he must have had with men who had been in touch with the first scholaship in Europe was of great use in correcting the narrowing influence of a simply Irish tradition.*(CW,II.361) (イタリック体は筆者)

さらに言葉を続けて彼は Keating と同時代の作家達との違いは現代にも当てはまると指摘し、それは ‘the difference that can be felt between the work of Irish writers of the present day who have spent part of their life in London or Paris, and the work of men who have not left Ireland’ (loc. cit.) であると大胆に言っている。これは明らかにアイルランドの伝統文化だけを認め、神聖化し、イギリスの伝統に繋がる一切のもの——言語でさえも——を排除しようとする Gaelic League の近視眼的な考え方を批判するものである。アイルランドをより深く知るには League とは逆にヨーロッパ的な視点に立つ必要がある。シングにはその自覚と同時にそうした視点からアイルランドを見ているという自負があった。

こうしてシングは Trinity College でのゲール語学習、パリ大学でのケルト文化研究を

通してアイルランド文化に向う基本姿勢を学ぶわけだが、この姿勢とアイルランド文化、言語についての Gaelic League の理念と関わりはどうであったのだろうか。League は19世紀後半、アイルランドに起こった民族の自決、国家としての独立意識の高まりに歩調を合わせ1893年、シングと同じ Trinity College の卒業生ハイド (Douglas Hyde, 1860—1949) を中心に組織された会で、文化面でのアイルランドの自立を目指すものであった。事実上の発足宣言ともいえる、前年の講演 ‘The Necessity for De-Anglicizing Ireland’ の中で、ハイドは衰退しつつあるゲール語復活がアイルランド固有の文化、伝統、文学の維持に繋がると力説した後で、次のように結論づけている。

In conclusion we may say this, that while our social and commercial relations make it a necessity for every man woman and child in this kingdom to learn English sooner or later, reverence for our past history, regard for the memory of our ancestors, our national honour, and the fear of becoming materialized and losing our best and highest characteristics call upon us imperatively to assist the Irish speaking population at the present crisis and to establish for all time a bilingual population in those parts of Ireland where Irish is now spoken, from whom all those who in the distant future may wish to investigate the history or the antiquities of our nation, may draw as from a fountain that vernacular knowledge which for such purpose is indispensably necessary.⁽¹⁷⁾

ハイドの主張の背景には、ゲール語人口の減少と共にアイルランドの文化が減びるのではないかという強い危機感があった。19世紀半ばの飢饉による餓死、移民、土地戦争を通じて行なわれた農民追放、慢性的な農業不振によって生じた出稼ぎ等によって人口は半減し、農村社会は崩壊しつつあった。⁽¹⁸⁾ コミュニティーの崩壊は彼らが日常語としているゲール語崩壊を意味していたし、それが農民間に伝わる豊かな口承文学、伝承説話の自然消滅を引き起こすとハイドは考えたのである。事実、ゲール語人口は1851年に総人口の25%、1911年には11%という統計からも明らかなように激減しており、この割合の推移は民族語としてのゲール語の将来を暗示するものだった。⁽¹⁹⁾ 逆に言えば、出稼ぎ、移民等の社会状況を反映して、英語教育が農民の間で確実に普及しつつあったのである。そこで、ハイドはまず英語化の流れを食い止め、現在残っているゲール語地域を維持しようとしたのである。英語化が進み、英語を将来必要とする現実問題はあっても、そうすることによってアイルランドの風俗、伝統を純粋なままで育て上げ、民族精神を盛り上げることができると考えたのである。League 創設時のハイドのこのような理想の中に政治的色彩は余り読みとれない。むしろ、シングがアラン島での取材ノートに書かれた次の記述と相通じるものがある。

I feel more every day that it is criminal to deprive these people of their language and with it of the unwritten literature which is still as full and as distinguished as [that of] any European people.(CW,II.116n)

両者の引用を較べて見る限り、ゲール語の維持に関するシングとハイドの理念の間に根本的な違いはないように思える。ハイド自身、農民の間に語り継がれたゲール語文学、説話を平易な Anglo-Irish 語に翻訳し、アイルランドの遺産を広く伝えようとする柔軟性をシング同様持っていたのである。

ところが、同じ League の創設者であった Eoin MacNeil (1867—1945) と Patrick H. Pearse (1879—1916) の考えはさらに突鋭化したものであった。MacNeil は League 創設が ‘the sole purpose of keeping the Irish language *spoken* in Ireland and of preserving and spreading Irish as means of social intercourse’⁽²⁰⁾ のためであったと述べ、又 Pearse はアイルランド国民文学をゲール語による文学だけに絞って、英語 (Anglo-Irish 語も含めて) による文学を拒否して自らゲール語で作品を発表しはじめた。⁽²¹⁾ 以後、League はアイルランド以外の一切の文化、言語を認めようとしなない偏狭なナショナリズムに裏打ちされた政治集団としての色彩を帯びていくのである。⁽²²⁾ 特に、Pearse が機関紙を編集した1903年から1909年の間に左傾化し、一層激しい政治路線を歩みはじめていたことが、ちょうど同じ時期に Anglo-Irish 語を用いて作品を発表していたシングには不運であった。Anglo-Irish 語はゲール語と英語に二極分化した文学潮流の狭間にあっていまだに確立された言葉ではなかった。ハイドの翻訳にしてもいわば実験的な段階にあって、純粋な文学表現用語として用いたのはシングが初めてであったといつて良い。尤も、19世紀の作家で Anglo-Irish 語を使用した者がいなかったわけではないが、概してそれはアイルランド人の戯画化の目的で行なわれていたのである。このこともあって、シングは League の英語文学批判の好餌となったのだ。だが、逆にいえば、イエイツ等の作家と違ってシングがアイルランドを生きた素材として描いていたことを示唆している。イエイツはアイルランドを一つの神話として抽象的に捉えようとしていたからである。

III

1902年、最終的にダブリンに戻ったシングは精力的に執筆を行う一方で、Gaelic League の矛盾を衝き始める。彼の League 批判には ‘The Old and New in Ireland’ (1902年 *The Academy and Literature* 所載) と ‘Can we go back into our mother’s womb? : A Letter to the Gaelic League’ (writ.1807, 未発表) の二編があり、何れにおいても *In Connemara* などの農民救済論と同様現実に根ざしたものである。尤も、後者の場合、*The Playbny of the Western World* (1907) を巡る騒動の後に書かれたものでタイトルからも窺

えるように幾分かトーンの高いものとなっている。この二編の論説の主題はゲール語の国語化に対する反論と Anglo-Irish 文学の可能性である。先に述べた Pearse の国民文学の定義以来、League はゲール語文学を推賞し、極端な場合にはゲール語で書かれているというだけで作品を高く評価することさえあった。⁽²³⁾ このことは逆にゲール語とゲール語文学の質の低下を生みだすことになった。一方、皮肉なことにハイドの翻訳によって英語でもアイルランドの精神、風土を完全に表現できることに気づいた作家達はイエイツを中心としてアイルランドを背景にした作品を続々に発表しはじめた。⁽²⁴⁾ そしてイギリスでもそれが新しい文学の潮流として評価されはじめると League は態度を硬化させていったのである。

こうした状況の下でシングは英語による（Anglo-Irish 語も含めた広い意味での）文学の可能性を説き、こう述べている。

This double way in which the new Irish spirit is showing itself has many points interest. With the present generation the linguistic atmosphere of Ireland has become definitely English enough, for the first time, to allow work to be done in English that is perfectly Irish in its essence, yet has sureness and purity of form. A generation or two ago a few writers like Aubrey de Vere, who penetrated themselves with English thought and English traditions of literature, wrote of Ireland with a certain easiness and grace, but writers who lived close to the soul of their country were kept back by the uncertainty of her linguistic sense, and nearly always failed to reach the finer cadences of English.(CW,II.384-85)

ここでシングが言うのは、従来の英語文学と違って、現在の英語文学がアイルランドの精神と言語上の微妙なニュアンスを十分に伝えているということである。この主張の裏には、アイルランド人が感情表現の手段とするまでに英語を日常生活の中に取り入れているという現実があった。だから Anglo-Irish 文学はゲール語文学と同様に現代アイルランド人の心と生活を描くことができると考えるのである。さらに言葉を続け、シングは League に問いかける。

Some of this new Irish work has very considerable value, but what, one cannot but ask, will be its influence on the culture of Ireland? Will the Gaelic stifle the English once more, or will the English stifle the new hope of the Gaels? (CW, II. 385)

無論、シングにはゲール語文学を否定する気はない。ここに取り上げた二者択一的問いかけはゲール語文学をのみ認め、Anglo-Irish 文学を否定する League の姿勢が誤っていることを彼らに気づかせる方便であるとも受けとれる。この質問に対して自らこう答える。

The Gaelic League with the whole movement for language revival is so powerfull that it is hard to think it will pass away without leaving a mark upon Ireland, yet its more definite hope seems quite certain to end in disappointment. (loc. cit.)

この頃すでに全国に渡って支部を設け、ゲール語教育の活動に入っていた League の影響が何らかの形でその足跡を残すことはあり得ようが、アイルランドから英語を駆逐し文化の非イギリス化を図ろうとする目的は単なる希望で終ることだろうと、シングは考える。この時までに、アラン島に五回渡り、又ウィックロー周辺の農民と接触することによってシングはゲール語地域でも日常語としてのゲール語の役割が失くなってきているという事実、話せはするが読み書きのできない文盲率が高い事実を目の当りにしていた。英語の普及が比較的遅れているアラン島でさえも若者はゲール語よりは英語の読み書きに関心を示している。⁽²⁵⁾こうした両方の言語が入り混った地域で住民にゲール語を国語として強いるのは彼らを一層混乱させることになるだろう。又、英語化がかなり進んだ東部、北部の地域では、ゲール語の学習を初歩から行わなければならず、それは外国語教育に等しいだろう。このようなゲール語を文学的な価値のある言葉にまで高めるには、英語がアイルランドの中に浸透するのにかかったのと同じ年月が必要だろうとシングは言う。

It is probable that Leinster and Ulster would take several centuries to assimilate Irish perfectly enough to make it a fit mode of expression for the finer emotions which now occupy literature. In the meantime, the opening culture of Ireland would be thrown back indefinitely, and there would, perhaps, be little gain to make up for this certain loss. Modern peasant Gaelic is full of rareness and beauty, but *if it was sophisticated by journalists and translators ... it would lose all its freshness, and then the limits, which now make its charm, would tend to prevent all further development.* It is a different thing to defile a well and an inlet of the sea. (CW, II. 385–86) (イタリック体は筆者)

ゲール語地域の激減に加えて、League が教育しているゲール語自体の質的な低下にもシングの反論の理由があった。彼が指摘するジャーナリストというのは、文学とはほど遠い平板で無味乾燥なゲール語を使ってプロパガンダに励む League 系の新聞、雑誌の執筆者を指すことは言うまでもない。このようなジャーナリズムによるゲール語の標準化はゲール語が本来持っている高度な芸術性を維持している伝統・文化そのものを歪めてしまうのではないかとシングは考えるのである。

さらに、地方の支部を通じてゲール語教育を行う Leaguer 達の資質に問題があったことも見逃せない。Roger McHugh が指摘するように、League は元来ダブリンを中心に根づ

いた運動であり、⁽²⁶⁾一部の指導者を除いた Leaguerのほとんどは基礎からゲール語を学んでまだ日の浅い者達だった。自らが基礎的な知識しか持たないままに、ゲール語を日常語にしている農民に読み、書きを教えるわけであるから、矛盾が露呈されるのは目に見えていた。ハイドは Gaelic League の内部で完全にゲール語を話せたのは僅かに六人であったと言っているし、Bretnach は教師のゲール語発音が英語的であったと言っている。⁽²⁷⁾このような反省からゲール語教育が整備されるのはずっと後のことで、シングが League を批判した当時の段階では教育の質そのものはかなり程度の低いものであったと言える。彼らの関心は教育以上にナショナリズムの啓蒙にあったのである。シングはこうした Leaguer のゲール語を ‘twaddle’ として片づけ、自分が学んだアイルランド精神を写し出す古代文学や農民の伝統、文化が生んだ伝承文学とは区別し、一線を引いて考えていた。

I speak here not of the old and magnificent language of our manuscripts, or of the two or three dialects still spoken, though with many barbarisms, in the west south, but of the *incoherent twaddle that is passed off as Irish by the Gaelic League*. (CW, II. 400) (イタリック体は筆者)

これは根本的に、彼ら Leaguer 達が農民の生活、文化に対して無知だったことと繁がってくる。1910年代まで指導者が Leaguer 達に地方へ出かけて実際に農民の生活に触れるよう説いている⁽²⁸⁾ことを考えると、彼らの活動がダブリン中心に行なわれていたことをよく示している。Watson は ‘These [Dubliners], if not all, would have been the sons or grandsons of countrydwellers or peasants, or at any rate have had a lively awareness of the essentially rural nature of Ireland.’⁽²⁹⁾と指摘し、ダブリンに住む者のほとんどが農民の生活を熟知していたようなことを書いている。だが、農民の生活は都市部のカトリック住民の生活とは本質的に異っていた。⁽³⁰⁾又、1880年から1913年の間に25万人から30万5千人とダブリン人口の急激な増加⁽³¹⁾は農村部からの流入を示してはいるが、内実はその多くが共同長屋に住む者で League に参加するようなインテリ、知識労働者ではなかった。だから、League の中にゲール語統一運動がもたらす伝統破壊の弊害に気づく者はほとんどいなかったと言える。尤も、中には Thomas MacDonagh (1878—1916) のように League の理念に疑問を抱く者が全くなかったわけではないが、それは公式に述べた疑問ではなかった。1904年、イエイツは MacDonagh との会見の後、日記にこう記している。

He is losing his faith in the League. Its writers are infecting Irish not only with English idiom but with the habits of thought of current Irish journalism, a most un-Celtic thing. ‘The League’, he said, ‘is killing Celtic Tradition’.⁽³²⁾

MacDonagh の不信の理由がシングの League 批判と全く同じものであったことは論を俟つまでもない。これはシングの批判が完全に立場の違った角度からなされたものではないことを良く物語っている。シングは農民の理想許りを捉えて、彼らがもつ ‘the cruder powers of the Irish mind’ (CW, II. 386) を奪い取ろうとしているのに気づかない League のナショナリズムの盲目的な面を批判しているのだ。

シングの考えは常にこうした ‘national tradition’ の維持、確保であった。その為には、政治、社会的イデオロギーの宣伝活動より先に、現実在即した言語教育を確立しなければならないと考えるのである。つまり、ゲール語地域でも bilingual 地域でもそれぞれの状況に応じた教育をしなければならないと考えるのである。この考えは League だけではなくカトリック団体が開設した national school が行っている英語教育に対しても向けられる。シングは *The Aran Islands* のノートの中で national school の問題点についてこのように書いている。

Already the boys are indifferent to these things [Irish language and unwritten literature], degraded by the dull courses of the national schools... The books they are compelled to use are often absurd. In one of their spelling-books I found ‘advice’ explained as ‘counsel’; a few of the boys may know what advice means but not many people on the island are likely to have heard of counsel. (CW, II. 116n)

シングは未知の語句を説明するのに未知の語句をもって説明することほど莫伽げたことはないと言う。Donegal, Connemara, West Kerry への旅を通して、農村地帯の学歴の低さを熟知したシングは紀行文の中でも学歴のなさ、言語の無理解の為に仲買業者に海草肥料を安く買い叩かれたり、都合よくあしらわれる農民達の姿を描いている。(CW, II. 307–9) そのような悲劇を避ける為にも現場に即した早急な言語教育の充実がなされなければならないのである。シングはこれ以上、具体的な教育のあり方を論じてはいないが、Gaelic League のゲール語教育のみならず、national school の英語教育に対しても批判的であった点に、農民の立場に立ったシングの公平な姿勢が窺えるのである。

IV

シングはこうして、伝統、文化の本質を損わず、しかも文学的にも通用する言語として英語のアイルランド方言、つまり Anglo-Irish 語を使用しはじめる。Anglo-Irish 語はアイルランドがイギリス化していく段階で、ゲール語の語彙、文体を引き摺ったまま成長していたが、言わばゲール語と英語の中間に位置するこのアイルランド方言こそが現代のアイルランド人の心情を最も良く反映させたものだとしシングは考えたのである。この An-

glo-Irish 語について、Alan J. Bliss は次のように説明している。

The Irish were taught their English by people of their own race, whose English was itself at several removes from Standard English, and had been learnt in part from books... *Because they learnt from each other, not only were the archaisms of seventeenth-century English preserved and propagated, but the influence of the Irish language on Anglo-Irish speech was cumulative; even in those areas where Irish has long ceased to be spoken, its influence on pronunciation, on vocabulary, and above all on syntax, is paramount.*⁽³³⁾ (イタリック体は筆者)

ゲール語はゲール語人口の衰微と歩調を合わせてそのまま消滅しつつあったわけではない。形を変えて、全く異質の英語の中で生きのびようとしていたのである。言い換えれば、農民達はゲール語の衰退と共に失った感情表現を Anglo-Irish 語によって行おうとしていたのだ。このゲール語を色濃く受け継いだ Anglo-Irish 語はシングが夏場を過し、育ってきた wicklow 周辺でも日常的に話されており、シングもそれに慣れ親しんでいた。『自伝』の中で、‘I had a very strong feeling for the colour of locality which I expressed in syllables of no meaning, but my elders checked me for talking gibberish when I was heard practising them.’ (CW, II. 5) とシングは語っているが、Stephens が指摘するように、スタンダードな英語は母親の厳格なピューリタニズム教育とオーバーラップしていた。⁽³⁴⁾ 大学でのゲール語学習、Anglo-Irish 語への傾斜はその意味でシングにとって「休息」を表わすものであり、母親や家族が属する Anglo-Irish Ascendancy からの「解放」を意味していた。従ってシングの Anglo-Irish 語の価値の発見はゲール語を学ぶ以前からその下地は充分に出来上っていたと考えられる。問題はこの Anglo-Irish 語を文学的に価値のある言語にまで高めることにあったのである。

ハイドの *Love Songs of Connaught* (1893) とグレゴリー夫人の *Cuchulain of Muirthemne* (1902) の二つの翻訳がイエイツに古代文学を現代に甦らせる可能性を教えたのと同様に、これらの作品はシングに Anglo-Irish 語を文学語として通用させる可能性の道を拓いた。シング自身ハイドの作品を読んだことや書評については直接何も記述していないので、影響関係を論じることにはできないが、*The Aran Islands* の中にハイドの作品名がでてくる (CW, II. 112, 133) ところから、1899年までには読んでいたことになる。シングの Anglo-Irish 語とハイドの翻訳語との比較についてはすでに Bliss や Kiberd などが言及しており、⁽³⁵⁾ ここでは省略する。同様に、グレゴリー夫人の作品はシングに Anglo-Irish 語のもつ豊かな表現力を教えた。

In her intercourse with the peasants of the west Lady Gregory has learned to use

this vocabulary in a new way, while she carries with her plaintive Gaelic constructions that make her language, in a true sense, a language of Ireland. (CW, II. 368)

グレゴリー夫人は素朴だが生き生きとした豊かさをもった農民の言葉を使ってアイルランド神話の英雄 Cuchulain を現代に甦らせた。シングは、農民の語る Anglo-Irish 語こそが現代アイルランドの国家としての個性を表現するものであり、こうした個性的な言語を使った文学こそ国民文学の名に値いするという確信を強めるようになったのである。だが、ここで注意しなければならないのは、前述したように Anglo-Irish 語自体イギリス化進行の度合いで、地域によって微妙な違いがあったことである。その為、シング自ら Anglo-Irish 語を規定しなければならなかった。Bliss がシングの作品を制作年代順に文体と語彙が微妙に異なり、そこに実験的な推移が見られると指摘しているように、⁽³⁶⁾ 作品自体が Anglo-Irish 語の可能性を試す実験であった。1907年、*The Aran Islands* 出版に際して、シングは知人に宛てた手紙の中で、彼が使用した農民語についてこう記している。

In writing out the talks of the people and their stories in this book — and in a certain number of articles on Wicklow Peasantry which I have not yet collected — I learned to write the peasant *dialect* and *dialogue* which I use in my plays.⁽³⁷⁾

これは実際に農民と交わることによって彼が得た言語上の知識が作品の中で生かされたことを示唆するものだが、Watson はこの言葉を受けて、‘While Synge learned his syntax on Aran, much of the “fully-flavoured” vocabulary and idiom of his plays he derived from the more English-speaking areas of the mainland.’⁽³⁸⁾と述べ、とりわけ Wicklow, Kerry の語彙に注目している。言わば、各地域の方言を合成して独自の言語を創造したということである。シング自身の手紙の引用を見ても、‘peasant *dialect* and *dialogue*’ を使用する方法を学んだとは言っているが農民の言葉をそのまま写しとったとは言っていない。彼が使用した言語がゲール語からの翻訳に近いものであったことは Seán Ó Tuama, Bliss などの批評家が指摘してきたし、⁽³⁹⁾ Kiberd などは *The Aran Islands* に登場する Michael がゲール語で書いた手紙のシングによる訳例を取り上げてシングの言語とゲール語の文体上の関係を実証的に述べている。⁽⁴⁰⁾ このことから、シングが使用した Anglo-Irish 語が農民の言葉をリアルに反映しているわけではなく、アイルランド各地の方言を取り入れながら、ゲール語の文体を生かしたものであることが解る。従って、シングの言語は彼自身の創造に負うところが大きかったが、League が批判するような完全に捏造した言語でもなかったのである。⁽⁴¹⁾ シングはそのような League の批判に対して次のように書いている。

Nearly always when some friendly or angry critic tells me that such or such a phrase

could not have been spoken by a peasant, he singles out some expression that I have heard, word for word, from some old woman or child, and the same is true also, to some extent, of the actions and incidents I work with.⁽⁴²⁾

シングにとって農民を描くことは、即農民のリアルな姿を描写することではなかった。シングは断片の中で、芸術作品の価値が‘uniqueness’にあると定義して、‘No personal originality is enough to make a rich work unique, unless it has also the characteristic of a particular [time] and locality and the life that is in it’ (CW, II. 350) と述べ、地域性、時代の特異性について論じているが、その一方で、さらに ‘What is highest in poetry is always reached where the dreamer is leaning out to reality, or where the man of real life is lifted out of it.’ (CW, II. 347) と述べ、リアリティーからの解放をも求めている。つまり、シングは農民をリアルに描くことではなく、むしろ農民の素朴な生活を豊かに形づくる核——生き生きとした想像力と力強さ——を描くことに目的を見い出していた。文学は日常の生活をそのまま描くことではなく、日常の生活とそこから逃れようとする夢想とが集合しあう世界を描くところにその価値があると考えている。言い換えれば夢想は日常の生活の折折に姿を現わす普遍性（本質的な生）である。シングは日常生活の断面に現われる生の本質を描こうとしているのである。シングの作品が常にこの夢想と現実との間に働く緊張を描いていると指摘したのは Alan Price であったが、⁽⁴³⁾ 夢想は心のリアリティーであり、これが現実の外面的なリアリティーと関わり合いながら劇的な緊張を生み出し、われわれは自身の普遍的な生そのものに触れるのである。アイルランドの豊かな民話や妖精譚はそうした農民の夢想の所産でもあった。シングの作品の登場人物がアイルランド人特有の空想癖をもち、自らの夢想的な言葉によってますます空想の世界へと飛翔していくことを疑う者は誰れもいないだろう。シングはこうした現実と夢想とが錯綜した世界を描くのに最も相応しい言語として特定の場所には「実在しない」言語を用いたのである。

このことを裏づけるような Maire Nic Shiubhlaigh の言葉がある。彼女はシングの作品の登場人物を演じたアベイ座の女優であったが、回想録の中でシングの台詞についてこう述べている。

In a short life —he died at the early age of thirty-eight— he wove them into sombre dramatic tapestries, embroidered with the rhythmic language of the true Irish peasant. His prose, highly musical and enriched with phrases of the most beautiful poetry, he divided simply by transcribing direct from the Gaelic of the islands. It is most difficult for an actor to master; most effective if delivered correctly.⁽⁴⁴⁾

彼女の言葉はシングが用いた Anglo-Irish 語が日常性からはかけ離れたものでありながら、実は何よりも農民の生活の核を掴み得ていたことを表わしている。それは多分に詩的な世界であった。シングの描くこうした特殊な言語及び内容が、ゲール語による国語統一を目指し、農民を神聖化して強調する Gaelic League の方針に抵触したことはすでに述べたことである。シングの作品は上演されたもののうち悲劇 *Riders to the Sea* の一編を除いて、全ての作品がアイルランドの真実を伝えていないとして批判され、攻撃された。シングがアイルランドの中で劇作家として市民権を得たのはその死後数年も経てからであった。各国の言葉に翻訳、上演され、好評を博して後、Gaelic League はシングの作品がもつ意味を真剣に考えるようになった。そして、シングが試みたように、アイルランド文学を国民文学として通用させる為には、アイルランド固有の伝統をもった Anglo-Irish 語が読者を獲得できること、又アイルランド人だけに限らない人間に共通する普遍的なテーマをもつものでなければならないことに気づき、さらにシングがアイルランドを愛し、実は League と同様にゲール語の延命策を真面目に考えていたことを知ったのである。1916年、League の指導者であった Thomas MacDonagh は *Literature in Ireland* の中で、*‘An organization like the Gaelic League is scarcely calculated to produce literature.’*⁽⁴⁵⁾ と League の限界を暗に認め、さらに Anglo-Irish 語のもつ可能性についてこう記している。

Irish has a different set of historic memories and of popular sayings. These have come into Anglo-Irish, but not in full force, and Anglo-Irish is the simpler for it. *New images have to be supplied from current life in Ireland; the dialect at its best is more vigorous, fresh and simple than either of the two languages between which it stands.*⁽⁴⁶⁾

(イタリック体は筆者)

ゲール語運動の高まりの中で、ゲール語の衰退に抗うことなく、現実を見つめ続けたシングは一見消極的とも思える言える言語観を語ってはいたが、その代りに Anglo-Irish 語に着目し、それを現代アイルランド文学を意味する言語にまで高めようとしたことはシングの洞察力の確かさを証明するものだった。MacDonagh の言葉と同じことがすでに十年以上も前にシング自身の口から発せられていたことや、シングの作品を契機に Anglo-Irish 語による文学が書かれ始めたことなどを考え合わせると、現代アイルランド文学にシングが残した足跡の大きさが窺われるというものである。

[注]

- (1) James Kilroy, *The ‘Playboy’ Riots* (Dublin: Dolmen, 1971), p.67.
- (2) David H.Greene and Edward M.Stephens, *J.M.Synge:1871-1909* (New York: Macmillan, 1959), p.11.
- (3) 拙稿, 「J.M.Synge の紀行文におけるナショナリズムの問題点」, 『鹿児島県立短期大学紀要-人文, 社会科学篇』(第36号, 1985) p.38., p.42.

- (4) Nicholas Grene, *Synge: A Critical Study of the Plays* (London: Macmillan, 1975), p.18.
- (5) George J.Watson, *Irish Identity and the Literary Revival* (London: Croom Helm, 1979), p.71.
- (6) Nicholas Grene, op. cit., p.9.
- (7) George J.Watson, op. cit., p.38.
- (8) Declan Kiberd, *Synge and the Irish Language* (London: Macmillan, 1979), p.227.
- (9) Alan Price, ed., *J.M.Synge, Collected Works*, vol. II(London: Oxford U.P., 1966), p.399.
以下、文中、引用後の略字及び、数字はこの版の頁数である。
- (10) Declan Kiberd, op. cit., p.19.
- (11) David H.Greene and Edward M.Stphens, op. cit., pp.17-19.
- (12) Declan Kiberd, op. cit., p.21.
- (13) *ibid.*, pp.19-21.
- (14) Mary C.King, 'Synge and The Aran Islands: a linguistic apprenticeship, in *Irish Studies I*, ed., P.J.Drudy (London: Cambridge U.P., 1980), p.63.
- (15) Declan Kiberd, op. cit., pp.31-33.
David H.Greene and Edward Stephens, op. cit., pp.64-72.
- (16) シングは創作ノートの中で、*The Well of the Saints* の題材をフランス中世民話に求めたことを明示している。(Ann Saddlemeyer, ed., *J.M.Synge: Collected Works*, vol. III, London: Oxford U.P., 1968, p.265.) 参照。又、*The Tinkers Wedding* (1909) の題材についてもシングはその一部をフランス民話集に求めていることが明らかになっている。(Ann Saddlemeyer, ed., *J.M.Synge: Collected Works*, vol. IX, London: Oxford U.P., 1968, p.xii.) 参照。
- (17) Douglas Hyde, 'The Necessity for De-Anglicizing Ireland' quoted by Dominic Daly, *The Young Douglas Hyde* (Dublin: Irish U.P., 1974), p.68.
- (18) J.C.Beckettによれば、1841年に8,175,000人あった人口が、1871年に6,552,000人となり、今世紀の初めまでには4,500,000人にまで急激に減少している。
J.C.Beckett, *The Making of Modern Ireland: 1603-1923* (London: Faber and Faber, 1966), p.345.
- (19) 堀越 智, 『アイルランド民族運動の歴史』(東京, 三省堂, 1979), p.105.
- (20) Declan Kiberd, op. cit., p.216.
- (21) *ibid.*, p.5.
- (22) J.C.Beckettは *The Making of Modern Ireland* の中で、Leagueの性格について次のように記している。
These movements were not in origin political; but it was inevitable that politically-minded nationalists should be attracted into them, and should try to use them for their own ends. (J.C.Beckett, op. cit., p.417.)
- (23) Declan Kiberd, op. cit., p.245.
- (24) 1892年、イエイツはGaelic League創設の意図を知って、英語によるアイルランド文学の可能性を問いかける文を公にしている。
Can we not build up a national tradition, a national literature, which shall be none the less Irish in spirit from being English in language? Can we not keep the continuity of the nation's life, not by trying to do what Dr. Hyde has practically pronounced impossible, but by translating or retelling in English, which shall have an indefinable Irish quality of rhythm [sic] and style, all that is best of the ancient literature? (John P.Frayne ed., *Uncollected Prose by W.B.Yeats*, vol. I, London: Macmillan, 1970, p.255.)
- (25) Alan Price ed., *J.M.Synge: Collected Works*, vol. II, op. cit., pp. 115-16., p.133.
- (26) Roger McHughはLeagueの活動が都市中心に限られていたことを指摘して次のように書いてある。
Its [Gaelic League's] rapid spread throughout the urban areas — it never took root in the areas where Irish was the mother-tongue of all or most of the inhabitants — had some curiously contrasting effects. (Roger McHugh and Maurice Harmon, *Short History of Anglo-Irish Literature*, Dublin: Wolfhound, 1982, p.131)

- (27) Declan Kiberd, op. cit., pp.223–24.
- (28) ibid, p.228.
- (29) George J.Watson, op. cit., p.71.
- (30) Seán Ó Tuama, 'Synge and the Idea of the national literature', in *J.M.Synge: Centenary Papers, 1971*, ed., Maurice Harmon (Dublin: Dolmen, 1972), p.2.
- (31) David Krause, *Sean O' Casey: The Man and His Work* (London: Macgibbon and Kee, 1960), pp.2–5.
- (32) Norman Jeffares, ed., *Yeats: Memoirs* (London: Macmillan, 1972), p.178.
- (33) Alan J.Bliss, 'The language of Synge' in Maurice Harmon, ed., op. cit., p.36.
- (34) Stephens はシンゲが Anglo-Irish 語に傾倒した理由として, スタンダードな英語がピューリタニズムに繋がっていたことを指摘している。
- His backwardness in spoken English was undoubtedly due to the influence of his mother, who abhorred vulgarity and sought divine aid in confining the already restricted speech of the period and the class she represented, in which expression of feeling was almost paralyzed. Synge's reaction found expression ultimately in his interest in the earthy language of the Irish peasant and in a fondness for profanity. Once, on recovering from an anaesthetic, he shouted, "Damn the bloody Anglo-Saxon language that a man can't swear in without being vulgar!" (David H.Greene and Edward Stephens, op. cit., p.15.)
- (35) Alan J.Bliss, op. cit., pp.38–39.
- Declan Kiberd, op. cit., pp.54–56.
- (36) Alan Bliss, op. cit., p.55.
- (37) Ann Saddlemyer, ed., *J.M.Synge: Collected Letters*, vol. II (London: Oxford U.P., 1984), p.103.
- (38) John B.Watson, op. cit., p.49.
- (39) Seán Ó Tuama, op. cit., p.12.
- Alan J.Bliss, op. cit., p.50.
- (40) Declan Kiberd, op. cit., pp.206–7.
- (41) ibid., p.204.
- (42) Ann Saddlemer, ed., *J.M.Synge: Collected Works*, vol. IV(London: Oxford U.P., 1984), p.363.
- (43) Alan Price, *J.M.Synge and Anglo-Irish drama* (1961; New York: Russell and Russell, rpt. 1972), p.69.
- (44) Maire Nic Shiubhlaigh and Edward Kenny, *The Splendid Years* (Dublin: James Duffy, 1955), p.40.
- (45) Thomas MacDonagh, *Literature in Ireland* (1916; New York, Kennikat, rpt. 1970), p.157.
- (46) ibid., p.48.

(昭和61年5月8日受理)